



ソ連崩壊後の中央アジア諸国における言語動態に関する調査研究

著者	臼山 利信
発行年	2012
その他のタイトル	Post-USSR dynamics of language situation in Central Asian countries
URL	http://hdl.handle.net/2241/118315

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月27日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520427

研究課題名（和文） ソ連崩壊後の中央アジア諸国における言語動態に関する調査研究

研究課題名（英文） Post-USSR dynamics of language situation in Central Asian countries

研究代表者

臼山 利信（USUYAMA TOSHINOBU）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：50323225

研究成果の概要（和文）：ソ連崩壊から20年が経過し、中央アジア諸国の言語状況は様変わりした。フィールドワークに基づく当該研究を通じて、(a) ロシア人中心の多民族共生社会の解体、(b) 国家民族主義に基づく言語政策の推進、(c) 基幹民族・国家語・イスラム教の三位一体的価値観の普及、(d) 社会のグローカル化、といった劇的な社会変化を背景に、国家語（基幹民族語）使用の実質化とロシア語の第二言語化が着実に進行していること、それと同時に国家語・ロシア語・英語の3言語中心の言語教育を志向する新しい言語教育観が急速に形成されていることが判明した。

研究成果の概要（英文）：The language situation in Central Asian countries has drastically changed today, 20 years after the collapse of the USSR. On the basis of fieldwork conducted in those countries, this research revealed that the sphere of each official ethnic national language use has been expanding more widely in society, that the status of the Russian language has been predictably transiting from the first authoritative language to the second, and that language education policy, in which the official ethnic national language, Russian and English are in particular oriented, has been strengthening. These phenomena are closely related to several social changes: (a) a dismantling of multi-ethnic society structures in which the Russians had been playing a central role; (b) language policy that has been promoted on the basis of core ethnic nationalism; (c) the spread of world views in which core ethnic groups, their respective official national language, and Islam have paramount values; and (d) Central Asian countries have been both globalizing and localizing.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総 計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：ソ連崩壊、中央アジア、言語動態、ロシア語、国家語

1. 研究開始当初の背景

(1) ソ連崩壊後、旧ソ連地域及び旧東欧諸国を

含めた旧社会主義ブロックにおけるロシア語の社会的機能域が急速に縮小した。

(2) ソ連崩壊前後の言語状況の劇的な変化を反映した社会言語学的な研究が世界で次々に発表された。

(3) 旧ソ連地域を対象とする言語状況に関する研究の多くが相対的に文献学的手法によるものであった。

(4) 旧ソ連地域の中から中央アジア諸国の言語状況を研究対象として絞り、実証的な観点から社会言語学的聞き取り調査及びアンケート調査に基づく研究を目指す戦略を立てた。

2. 研究の目的

ロシア連邦を除く他の旧ソ連地域、特に中央アジア諸国を研究対象として言語動態という視点からロシア語と国家語（基幹民族語）の機能的転換過程を究明する。

3. 研究の方法

(1) 中央アジアのウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタンの国民を対象に国家語・ロシア語・英語などの使用状況やそれらの言語に対する意識を探る社会言語学的調査を行った。

(2) 社会言語学的調査は対面式の聞き取りインタビューの方法を採用した。多数の被験者に対するアンケート調査の実施は国内の政治的な事情から大事を取って断念した。

(3) 調査の工夫として、特に世代間の意識差（10-20代、30-40代、50-60代）、出身地域の意識差に着目した。

(4) 調査項目は、年齢、性別、専門・職種、出生地、民族、宗教、第一言語、教育言語、国家語の習得度、ロシア語の習得度など全部で30であった。

(5) 聞き取りインタビューはアンケート項目に準じる内容について15～30分程度の長さでじっくりと柔軟性を持って行った。

4. 研究成果

(1) 主要研究成果

聞き取り調査はウズベキスタン、キルギス、タジキスタンにおいて全体でロシア系19人、非ロシア系18人に対して実施した。さらにトルクメニスタンを除く中央アジア4カ国の言語状況に関するこれまでの調査資料と文献資料の分析・考察作業を行った。また民族的マイノリティーである在豪ロシア系住民の言語使用に関する実態研究との比較を行った。その結果、以下の7点が過渡的可能性として判明した。

①ウズベキスタンの20代のロシア系住民の被験者は、国内での社会的成功を実現するためにはウズベク語の習得は不可欠という意識を持ち、ウズベク語習得の志向を持ち始めている。

②ソ連時代に教育を受けた40代のロシア系

住民の被験者は、国内のウズベク民族主義の高まりやウズベク語使用の優勢化傾向から不便さを実感しているものの、年齢的理由などからウズベク語習得を志向するには至っていない。

③ウズベキスタン、キルギス、タジキスタンにおいて国家語未習得のロシア系住民の雇用環境が悪化し続けており、20～30代の若者がロシアなどへの国外移住が活発化している。一方、50代以上のロシア系住民は国外移住を避け、留まる傾向がある。

④中央アジアではソヴィエト時代に学校教育を受けた30代後半以上の世代のロシア語運用能力は健在である。一方、ソ連時代の教育経験のないそれ以下の若い世代のロシア語運用能力は顕著で、基幹民族語とロシア語の良質なバイリンガル人口の比率は確実に下がっている。

⑤ソ連時代の言語秩序（ロシア語を最上位言語とする階層構造）が完全に解体され、新しい言語秩序の形成（国家語の基幹民族語を最上位言語とする階層構造）が進行し、グローバルな言語志向動向とローカルな言語志向動向が併存する傾向が強まっている。

⑥歯止めのかからないロシア系住民の人口流出により残されたロシア系住民の社会における民族的孤立化、ディアスポラ化が進んでいる。

⑦在豪ロシア系住民のロシア語の保持と消失のメカニズム（言語保持ファクターの存在とその作用度）が中央アジア諸国における今後のロシア語の存在様態の予測に役立つ。

以上の点から、ソ連時代のようなロシア語と基幹民族語の2言語併用社会から基幹民族語による1言語中心主義社会への構造転換が進行している。

(2) 国内外の位置づけとインパクト

当該研究成果は独自のフィールドワークに基づくものであり、中央アジアにおけるロシア語と国家語（基幹民族語）の機能的転換過程の実態の一端を具体的に示す実証的な成果である。国内外の中央アジア地域研究分野及び社会言語学分野における貴重な学術的データとなる。また旧ソ連地域全体の個別言語動態研究にも大きく貢献できるインパクトを持つ。

(3) 今後の展望

調査収集したデータの一部は十分に整理・分析がなされておらず、考察結果を国際会議発表や学術雑誌論文として国内外で発表しなければならない。本研究で得られた知見や研究手法を活用し、他の旧ソ連地域内の言語動態研究を進め、対照言語動態学という新たな研究領域の基礎確立に寄与していきたい。

また、世界の社会的民族マイノリティーの言語と文化の保持・消失の構造や機能に関する研究領域の発展にも貢献したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

- ① 臼山利信、中央アジアの言語状況とグローバルパラダイムシフト、『国際学術会議「文明のクロスロード9—言葉・文化・社会の様相—」予稿集』、国際学術会議報告書(2012年3月15日・16日、ウズベキスタン共和国、サマルカンド、サマルカンド国立外国語大学)、日本とウズベキスタン共和国の外交関係樹立20周年記念事業、臼山利信監修、筑波大学中央アジア事務所、査読有、30-31頁、2012.
- ② 臼山利信、グローバル化する中央アジアの社会と言語状況、『第3回高麗大・筑波大学合同フォーラム』、国際学術会議報告書(2012年2月10日、ソウル、大韓民国、高麗大・筑波大学合同フォーラム、筑波大学中央アジア事務所、査読無、11-18頁、2012.
- ③ 臼山利信、「オーストラリアとロシア語—在豪ロシア系移民のロシア語・ロシア文化の保持に関する一考察—」、『ロシア語学と言語教育』堤正典・小林潔編、III、神奈川大学ユーラシア研究センター、査読無、49-63頁、2011.
- ④ USUYAMA, Toshinobu, The Assimilation Process of Russian Immigrants and their Preservation of the Russian Language and Culture in Australia,『文明のクロスロード8—ことば・文化・社会の諸相—』、国際学術会議報告書(2011年3月10日・11日、ウズベキスタン共和国、タシケント、タシケント国立東洋学大学)、臼山利信監修、筑波大学中央アジア事務所、査読有、15-23頁、2011.
- ⑤ 臼山利信、「タジキスタン共和国ドシャンベ市における社会言語学的調査の実施報告—若者たちの言語意識を中心として—」、『第7回 文明のクロスロード—ことば・文化・社会の諸相—』、日本学際シンポジウム報告書(2009年12月9日・10日、カザフスタン共和国、アルマティ、カザフ国立大学)、西村よしみ・Balakaeva Lyaila 監修、筑波大学中央アジア国際連携センター、査読無、41-53頁、2010.
- ⑥ УСУЯМА, Тосинобу, К вопросу о сохранении русского языка и культуры русскими в Австралии, 『スラヴィアーナ』、日本スラヴ人文学会学会誌、査読有、1(23), 2009, pp.121-140.

〔学会発表〕(計 13 件)

- ① 臼山利信、「民族国家語とロシア語—グ

ローカル化する中央アジアの言語状況—」、2011年度神奈川大学国際交流事業シンポジウム《ユーラシアを研究する》

「日露の交流と言語教育—ロシア語の新たな国際性—」、2012年3月24日、共催：神奈川大学ユーラシア研究センター・神奈川大学言語教育センター、神奈川大学.

- ② 臼山利信、「民族的アイデンティティと言語—在豪ロシア系移民の民族語・民族文化の保持と消失のメカニズム—」、特別講演会、キエフ国立大学言語・文化カレッジ東洋学部日本語講座、キエフ、ウクライナ、2012年3月21日.
- ③ 臼山利信、中央アジアの言語状況とグローバルパラダイムシフト、国際学術会議「文明のクロスロード9」、2012年3月15日、ウズベキスタン共和国サマルカンド国立外国語大学、サマルカンド.
- ④ 臼山利信、グローバル化する中央アジアの社会と言語状況、第3回高麗大・筑波大学合同フォーラム、2012年2月10日、高麗大・筑波大学合同フォーラム、筑波大学中央アジア事務所、査読無、11-18頁、2012.
- ⑤ 臼山利信、「ポスト・ソヴィエト時代の社会構造の諸変化と中央アジアの言語状況」、特別公開講演会、タシケント国立東洋学大学アジア極東学部日本語講座、タシケント、ウズベキスタン共和国、2011年11月26日.
- ⑥ 臼山利信、「同化か、それとも保持か? (在豪ロシア系住民のロシア語及びロシア文化を事例として)」、『時間と空間におけるロシア語及びロシア文学』、第12回国際ロシア語ロシア文学会世界大会、第1分科会「国家言語政策：国家及び国際交流におけるロシア語の役割と地位」、上海外国語大学、上海、中華人民共和国、2011年5月12日.
- ⑦ USUYAMA, Toshinobu, The Assimilation Process of Russian Immigrants and their Preservation of the Russian Language and Culture in Australia, 国際学術会議「文明のクロスロード8」、2011年3月10日、ウズベキスタン共和国タシケント国立東洋学大学、タシケント.
- ⑧ USUYAMA, Toshinobu, Preservation and Loss of the Minority Ethnic Language and its Culture—On the Case of Russian Immigrants in Australia—, Special Public Lecture, University of Central Asia, Aga-Khan Humanities Project Office, 47A Druzhby Narodov Street, Dushanbe, Republic of Tajikistan, 15 February, 2011.
- ⑨ USUYAMA, Toshinobu, Preservation and Loss of the Minority Ethnic Language and its Culture—On the Case of Russian

Immigrants in Australia—, Special Public Lecture, Russian-Tajik Slavonic University, Faculty of Philology, Aud.503, N.Karabaev street 102/190, Dushanbe, Republic of Tajikistan, 11 February, 2011.

- ⑩ 臼山利信、「言語と文化の保持及び消失」、国際ラウンドテーブル「グローバリゼーションにおける言語と文化」、主催：アラバエフ記念キルギス国立大学、本部棟会議室、ビシュケク、キルギス共和国、2011年2月10日。
- ⑪ USUYAMA, Toshinobu, Preservation and Loss of the Minority Ethnic Language and its Culture—On the Case of Russian Immigrants in Australia—, Special Public Lecture, I. Arabaev Kyrgyz State University, Conference Hall(Main Building), 51 Razzakov street, Bishkek, Kyrgyz Republic, 7 February, 2011.
- ⑫ USUYAMA, Toshinobu, Social and Linguistic Research into the Preservation of the Ethnic Language and Culture of Russians in Australia, ANZSA Conference (The Australia and New Zealand Slavists' Association), 4 February 2010, The Australian National University, Canberra.
- ⑬ 臼山利信、タジキスタン共和国ドシャンベ市における社会言語学的調査の実施報告-若者たちの言語意識を中心として-、国際学術会議「文明のクロスロード7」、2009年12月10日、カザフスタン共和国カザフ国立大学、アルマトイ。

〔図書〕(計1件)

- ① Вербицкая Л.А. и др., 上海外語教育出版社, Русский язык и литература во времени и пространстве (XII Конгресс Международной ассоциации преподавателей русского языка и литературы), Том 1, 2011, 834. (分担執筆：臼山利信、「同化か、それとも保持か？(在豪ロシア系住民のロシア語及びロシア文化を事例として)」、『時間と空間におけるロシア語及びロシア文学』、第12回国際ロシア語ロシア文学会世界大会、上海外語教育出版社、上海、132-139頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

臼山 利信 (USUYAMA TOSHINOBU)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：50323225